

リテラシーを支える批判的思考：読書科学への示唆*

京都大学大学院教育学研究科 楠 見 孝**

1. はじめに：読書からリテラシーへ

国際読書学会 (International Reading Association: IRA), は国際リテラシー学会 (International Literacy Association: ILA), となった。その背景には、読書(reading) からリテラシー (literacy) への研究の関心の移行がある。

国際リテラシー学会は、リテラシーを「視覚的、聴覚的、デジタル資料を用いて、あらゆる領域と文脈において、同定、理解、解釈、産出、コミュニケーションする能力である」(Literacy is the ability to identify, understand, interpret, create, compute, and communicate using visual, audible, and digital materials across disciplines and in any context.) と定義し、「読む、書く、コミュニケーションする能力は、人々をお互いに結びつけ、考えられなかったことを達成する能力となる。コミュニケーションとつながりは、私たちが何者で、いかにともに生活し、世界と交流するのかの基礎となる」(The ability to read, write, and communicate connects people to one another and empowers them to achieve things they never thought possible. Communication and connection are the basis of who we are and how we live together and interact with the world.) と述べている (International Literacy Association, 2018)。このリテラシーの定義では、紙のテキストの読み(読書)だけでなく、様々な媒体のそして、教科・学問領域の内容を読み、書き、理解し、コミュニケーションすることが重視されていることが分かる。狭義のリテラシー(識字)は読み書き能力である。国際リ

テラシー学会においては、世界における識字率の向上は、リテラシー教育の重要な問題として位置づけられている。一方、識字率が100%近い日本においては、日本読書学会が、読書からリテラシーに研究領域を拡大する際に、批判的思考に支えられた高次リテラシーや市民リテラシーが重要であると筆者は考える。

そこで本稿では、まず、2では、リテラシーのもととなる概念が母語の読み書き能力であることを説明する。つづく3では、高次のリテラシーとは、母語の読み書き能力を土台として、論理的で内省的な批判的思考によって支えられたコミュニケーション能力であることを説明する。ここでは、批判的思考が、証拠に基づく偏りのない解釈や推論をおこなう上で、重要な役割を果たしていることを述べる。そして、内容的知識に基づく複数のリテラシーが階層構造をもつモデル図を提案する。そして、4以降では、それぞれの高次リテラシーと批判的思考の関係を議論する。

2. リテラシーの概念

リテラシーのもととなる狭義の概念は、1で述べた母語の読み書き(識字)能力である。これは、文字メディアによるコミュニケーション能力である。リテラシーは、教育によって獲得され、学習、生活、職業などの文化的行為を支える基礎スキルである。日常生活や職業の中で機能するためには、こうした狭義のリテラシーである母語の読み書き能力に加えて、計算リテラシー(numeracy, quantitative literacy)や、図表・地図などを含む様々な書かれたものを読みとる文書リテラシー(document literacy)が必要である。これらを含む能力を機能的リテラシー(functional literacy)あるいは仕事に必要な能力を

* Critical thinking in support of literacy development: Implications for reading science

** KUSUMI, Takashi (Graduate School of Education, Kyoto University)

示して仕事場リテラシー (workplace literacy) という (e. g., Bhola, 1995)。

機能的リテラシーは、生活、学習、職業などの文化的行為を支える汎用的な基礎スキルである。しかし、ここには、批判的思考の要素はあまり入っていない。

3. 高次リテラシーと批判的思考

高次リテラシーは、母語の読み書きやコミュニケーション能力を土台とした、教科・学問領域や文脈固有の知識と、批判的思考に基づく読解能力・コミュニケーション能力である。

たとえば、OECDによる生徒の学習到達度調査のPISA (Programme for International Student Assessment) では、社会の進歩に直面する市民の準備の度合いを評価する際の能力の中の認知的側面 (知識とスキルなど) を学力と呼ばず、リテラシーと呼んでいる。すなわち、リテラシーは、情報にアクセスし、管理・統合・評価する能力であり、以下の3つに分けて測定されている (国立教育政策研究所, 2016)。

- ① 読解リテラシー¹⁾：自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力
 - ② 数学リテラシー：様々な文脈の中で数学的に定式化し、数学を活用し、解釈する能力
 - ③ 科学リテラシー：思慮深い市民として、科学的な考えをもち、科学に関連する諸問題に関与する能力
- たとえば、読解リテラシーは、図1に示すように、(i) テキストから「情報にアクセスして取り出し」(たとえば、土台となる根拠を見つけ)、(ii)と(iii)「テキストを解釈／統合」して幅広い一般的な理解を形成し、さらに解釈を展開し (たとえば、根拠を検討した上で、推論をおこなう)、(iv) 知識を活用してテキストの内容と形式を「熟考・評価」する (たとえば、テキストに基づいて行動するための計画を評価する) といった構成要素に分かれる。そして、これらのプロセスは、PISAの枠組みでは明示さ

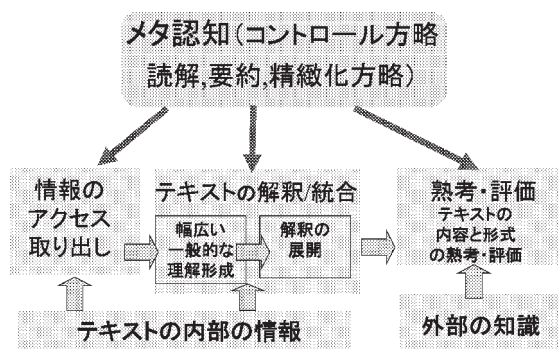


図1 PISAの読解リテラシーの構成要素
(国立教育政策研究所 (2016) に基づいて筆者作成。
訳語や上部にメタ認知が加わっている点が異なる)

れていないが、メタ認知 (コントロール方略や読解方略など) によってコントロールやモニターされていると考えられる。

これは、図2に示す批判的思考の構成要素と対応をもっている。ここで、批判的思考とは、多くの研究者が依拠するEnnis (1987) の定義によれば「何を信じ、何をすべきかを決定することに焦点をあてた合理的で内省的思考」である。この定義に基づいて、ここでは批判的思考を「証拠に基づく論理的で偏りのない、内省的思考」と定義する。また、批判的思考は、読解、数学、科学などの様々な教科・学問領域において、さらに学校を卒業したあとの、様々な職業生活においても、幅広く適用できる汎用的スキルである (たとえば、楠見, 2016)。その批判的思考のステップは、図2に示すように、テキスト、図表などの (i) 情報にアクセスし、主張やそれを支える根拠を取り出す「明確化」、(ii) その情報の根拠や隠れた前提を検討する「推論の土台の検討」、そして、(iii) 情報に基づいておこなう「推論」、(iv) 行動や発言や発表などをおこなうための「行動決定」に分かれる。これらは、内省的思考 (リフレクション) であるメタ認知によって、意識的に吟味 (モニター) され、コントロールがされている。さらに、これらのプロセスは、知識やスキル (教科・学問などの領域に固有のものと批判的思考の各ステップに関わる汎用的なもの) が支えている。また、他

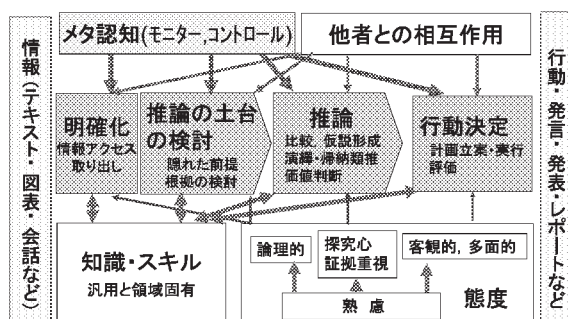


図2 批判的思考のプロセスと構成要素
(楠見, 2016を改変)

者との相互作用が、(i) から (iv) の認知プロセスそれぞれで関わる。他者からのフィードバックは、内省を促し、判断に関わる自らのバイアスや誤りを修正することにつながる (e.g., Ennis, 1987; 楠見, 2016)。

批判的思考の各プロセスを支える批判的思考態度は、図2右下に示すように、大きくつぎの5つに分けることができる（平山・楠見，2004；楠見，2016）。

- (a) 論理的思考態度：論理的に考えようとする態度
- (b) 証拠の重視：証拠に基づいて考えようとする態度
- (c) 探究心：多くの情報を探究しようとする態度
- (d) 客観性：偏見や先入観にとらわれず客観的、多面的に考えようとする態度
- (e) 熟慮的態度：じっくり立ち止まって考えようとする態度であり、上記4つのすべてを支えている。

リテラシーは単一ではなく、複数のリテラシーが階層的な構造をもつ。ここでは、リテラシーを、図3で示すように、4層の構造に基づいて考える。第1階層は、2.1で述べた土台となる読み書き能力のリテラシー、それを土台として展開した計算・文書リテラシーを含む機能的リテラシーである。さらに、これらのリテラシーに依拠した汎用的な批判的思考のスキルと態度からなる。つぎに述べる第2階層は、第1階層を土台とした情報を読み解くための読解・メディア・情報リテラシーと科学・数学リテラシーであり、主に義務教育や高校教育の段階で育成する。

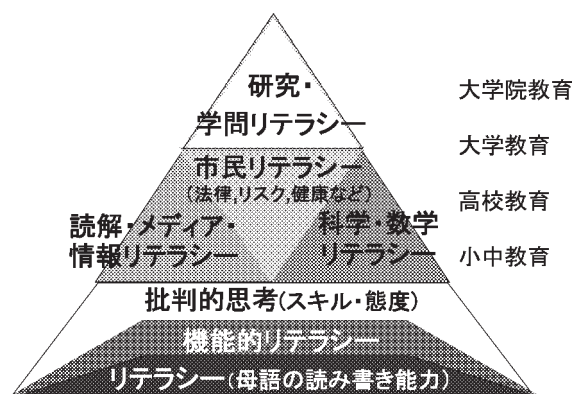


図3 批判的思考とリテラシーの階層
(楠見, 2016を改変)

4. 読解系リテラシーのテクノロジーによる展開

第2階層左側の読解系のリテラシーとして、テキストや図表を読み解く前述の「読解リテラシー」、マスメディアの性質や技法を理解した上で読み解く「メディアリテラシー」、ICT機器やインターネットを利活用して、情報を読み解く「情報リテラシー」がある。

「メディアリテラシー」は、リテラシー研究においては、1970年代から研究や教育実践がされてきた (e.g., Masterman, 1985)。メディアリテラシーは大きく3つの構成要素に分かれる。

- ① メディアの表現技法の知識：メディアの表現技法、制作過程（編集による取捨選択や誇張など）、放送局、新聞社などの企業目的（利潤を上げ、影響力をもつ組織であるなど）に関する知識
 - ② メディアのバイアスに気づく能力：メディアから発信される情報について、そのバイアスに気づき、批判的に分析・評価・能動的に選択して、読み解く力
 - ③ 情報を収集・活用する能力：メディアにアクセス・選択し、能動的に活用する能力。さらに、メディアを通じてコミュニケーションする能力
- このように、メディアリテラシーは、市民が新聞や雑誌

誌を読んだり、テレビを視聴する際に重要な役割を果たしている。その理由は、学校を卒業した市民にとっては、知識獲得の多くの部分は、テレビや新聞、雑誌などのマスメディアによることが多いためである。科学・技術の進歩や社会・政治などの情報を得るためには、マスメディアからの情報を活用することが重要である。とくに批判的教育学 (critical pedagogy) を土台とするメディアにおけるステレオタイプや支配的価値観などを分析するためのメディアリテラシーを、批判的メディアリテラシー (critical media literacy) という (Kellner & Share, 2005)。

なお、情報の媒体 (メディア) に関わるテクノロジーの進歩によって、市民はマスメディア以外の情報を利用するための新しいリテラシー (new literacies) を身につけることが必要になる (e.g., Palincsar & Ladewski, 2006)。たとえば、コンピュータ、インターネット、ICT の利活用に特化したときはそれぞれコンピュタリテラシー、インターネットリテラシー、ICTリテラシーという。これらを総称してテクノロジーリテラシーともいう。これらのリテラシーには、テクノロジーによってツールを利用する操作的リテラシー (operational literacy) (操作能力) が強調されがちである。しかし、操作だけでなく、情報を分析・評価し、行動する批判的思考が重要である。

テクノロジーの進歩は、情報の送り手-受け手の役割を変化させた。テレビ番組は、送り手の構成した順序に従って、受け手が最初から直線的に読解・視聴する送り手主導の受動的な情報媒体である。メディアリテラシーは、こうした情報を正しく理解するためのものである。それに対して、近年影響力が増大しているインターネットは、受け手が情報を検索し、読み進め方 (ナビゲート) の順序を能動的に決定する受け手主導の媒体である。

また、マスメディアは、情報が専門家によって多段階で編集がされているため、編集された情報として、その質と信頼性の評価ができる。一方、インターネットは誰でも発信者になれるために、発信者によってその質や信

頼度は様々である。とくに、インターネットの情報は、受け手がインターネットリテラシーによって、情報を活用するために情報の信頼性を評価することが重要である。

さらに、国際的な教育団体ATC21S (Assessment and Teaching of 21st Century Skills) が提唱しているのが、21世紀型スキルである (Griffin, McGaw, & Care, 2012)。これは、21世紀の市民がもつ情報通信技術 (ICT) の進歩に対応した汎用的スキルである。ここで挙げられているのは大別すると以下の4カテゴリーのスキルである。

- ① 思考の方法：創造性と革新性、批判的思考・問題解決・意思決定、学び方の学習・メタ認知
- ② 仕事の方法：コミュニケーションと協調
- ③ 仕事のためのツール：情報リテラシー、情報通信技術 (ICT) リテラシー
- ④ 市民生活：地域そして地球規模の市民性、人生とキャリア発達、異文化理解と適応能力を含む個人的責任および社会的責任

すなわち、21世紀の社会という文脈で重視されているのは、①思考の方法としての批判的思考や問題解決スキルである。そして、これらの思考方法を基盤として、仕事の場においては、②コミュニケーション能力と③テクノロジーリテラシーが求められている。市民生活においては、④ローカルそしてグローバルな市民性が求められている。ここでは、異なる文化・価値観をもつ他者を理解し、協調し協働する能力が必要とされている。さらに、内容的な知識である語学、芸術、数学、経済学、科学、地理、歴史、政治などに基づいて、批判的に思考し、効果的にコミュニケーションすることが重視されている (楠見, 2016)。

5. 証拠に基づく判断を支える理数系リテラシー

理数系のリテラシーとしては、図3の第2階層右側に示すように、3で述べた「科学リテラシー」、「数学リテラシー」がある。さらに、数学リテラシーの下位概念には、図表などの統計情報の読み解きに特化した統計リテ

ラシーがある。ここでは、科学的テキストの読解や科学に関わる意思決定を支える科学リテラシーに焦点をあてる。

科学リテラシーは、科学的知識と批判的思考に基づいて、自然界と科学技術を理解し、証拠に基づいて結論を導く能力である。生活・社会における科学に関わる問題解決、行動を支えている。市民のための科学リテラシー(civic scientific literacy)は、大きく3つに分かれる(Miller, 1998)。

- ① 基本的な科学的構成概念や用語の理解。新聞や雑誌における論争的なテーマを理解するために必要であり、ここには、4で述べた読解系のリテラシーが関わる。
- ② 科学的探究の過程や性質の理解(例：実験や観察など)。
- ③ 科学・技術が個人や社会に及ぼす影響の理解。ここには、批判的思考によって、問題を明確化し、情報の信頼度を判断し、推論をして、意思決定をする過程が関わる。

なお、数学リテラシーの下位概念である統計リテラシーは、科学的テキストや図表を含む文書の理解を支えている。その構成要素には、確率や比などの統計用語や概念の理解、サンプリングや確率計算などの手法理解、そしてデータに基づいて意思決定する際に、データの誤差や不確定性などを踏まえることなどがある。

6. 市民リテラシーからグローバルリテラシーへ

市民リテラシー(civil literacy)とは、市民生活に必要な情報を読み取り、適切な行動をしたり、発信するためのコミュニケーション能力である。市民リテラシーは、図3に示す第1階層の機能的リテラシーを土台に、第2階層のメディアリテラシーや科学リテラシーなどに支えられた、市民生活に関わる多くの分野の知識に基づくコミュニケーション能力である。これらは、法律、リスク、健康、金融などの、市民が関わる様々な領域のリテラシーの総体であり、批判的思考によって支えられている。

市民リテラシーをもつ市民とは、批判的思考能力と態度をもち、生活に必要な情報を正しく読みとり、人に正確に伝え、考えの違う人の意見に耳を傾けつつ適切に行動する人である。そして、責任感をもって、自律的に社会に関わり、倫理的・道徳的判断をおこない、社会的問題を解決する。これは、市民性(citizenship)の基盤である(楠見, 2016)。

市民リテラシーは、高校までの教育や大学教養教育、読書やマスメディアを通して、学習するとともに、生活や職業において積み重ねた経験や学習によって獲得される。

こうした市民リテラシーに加えて、2030年の市民に必要とされるのが、世界市民として生きるためのグローバル・コンピテンスである。これは、PISA2018で測定される予定である(OECD, 2018)。グローバルコンピテンスとは、グローバルで文化横断的な問題について、批判的、複眼的に分析し、様々な差異が、人の知覚、判断、自他の概念にいかにか影響するのかを理解し、他者への尊重を土台として、異なる背景をもつ他者との間に、オープンで適切で効果的な相互作用をもつことのできる能力である(OECD, 2018)。

PISA2018では、グローバルコンピテンスは、つぎの3つを測定する予定である。

- ① 知識：世界や他の文化についての知識であり、間違った情報やステレオタイプに左右されないためのものである。グローバルで文化横断的な問題(状況)についての知識と理解を支えている。
- ② 認知スキル：世界を理解し行動するための、批判的分析、異なる視点を理解するなどの認知的スキルや適切で柔軟で効果的なコミュニケーションをするためのスキルである。
- ③ 社会的スキルと態度：異質な他者の思考、信念、感情を理解する社会・感情的スキル、および、他の文化の人を受け入れる開放性、多文化の尊重、グローバルマインドと責任感などである。

①と②は、認知能力であり、メディアリテラシーなど

が関わる。一方、③は非認知能力として、人の尊厳や文化多様性に関する価値観 (value) と結びつき、基準や規範として、人の判断を支え、異質な他者や世界についての適切な情報処理と行動を導くことになる (価値観は、4 つめに挙げられているが、PISA2018では測定されず、今後の検討課題である)。この非認知能力を含む点が、リテラシーではなく、より広範な概念であるコンピテンスを用いる理由である (楠見, 2018)。

7. 批判的思考に基づく学問・研究リテラシー

「学問リテラシー」(academic literacy)は、大学生が大学における学習のために必要とするリテラシーである。大学生は、学習において、批判的に読む・聞く (情報収集)、話す (討論やプレゼンテーション)、書く (レポートや論文) が必要である。そのため、大学の大衆化にともなう入学者の学力低下と教育改革の流れの中で、リテラシー教育や批判的思考教育は、大学の初年次教育、哲学、論理学などの入門科目、そして、ライティング、リーディング、プレゼンテーションなどの学習スキル育成の科目で取り上げられるようになった (楠見, 2014; 楠見・平山・田中, 2012; 鈴木・大井・竹前, 2006; 武田・平山・楠見, 2006)。たとえば、Tamblin & Ward(2006)では、大学生が効率的な学習者になるための方法の1つとして、批判的に考えることを位置づけている。そこには、情報収集、読解法、討論、発表、レポート、小論文の書き方などの学習スキルと関連づけて、批判的思考が論じられている。また、Paul & Elder (2001) は、良き学習者になるための方法として、批判的思考のスキル(問いを出す、情報を集めて評価する、規準に照らして適切な結論を導くなど)を位置づけ、それが専門を学ぶための力になるとしている。これらは、読み書きやコミュニケーション能力であるリテラシーを基盤として、大学で学ぶための汎用的な学習スキルを発達させた学問リテラシーである (楠見, 2011)。

さらに、学生が、勉学を進め、専門課程・大学院に進み、学術論文を読んだり書いたりする専門家・研究者と

して活動するためには、「研究リテラシー」(research literacy)が必要となる。研究リテラシーは学問領域固有の高度な知識・スキルと研究遂行のための汎用的なスキルからなり、大学院教育そして研究者としての実践を通して獲得するものである。図3の三角形の頂点で示したように、研究者は、先に述べた市民リテラシーと市民性を土台にした市民に向けて「伝える」コミュニケーション能力をもつことも必要である (楠見, 2012)。

なお、研究リテラシーを支える学問領域固有の知識・スキルは、領域固有のリテラシーとして捉えることができる。たとえば、心理学リテラシー (楠見, 2012) や脳神経科学リテラシー (永岑・楠見, 2010)、リスクリテラシー (楠見, 2012)、健康リテラシー (楠見, 印刷中) などがある。これらの個別専門領域のリテラシーは、大きく3つの構成要素に分けることができる。

- ① 基本的な用語、概念の理解 (たとえば、放射線リスクリテラシーならば、ベクレルやシーベルトの理解)
- ② 方法論の理解 (科学的な手法、過程の理解、たとえば、リスク評価の手法、確率論の理解)
- ③ 政策、問題に関する理解とその適切な解決行動 (たとえば、リスクを減らす方法)

これは、5で述べた科学リテラシーの3要素と対応する。とくに、②に述べた実証的な科学的方法論に関しては、異なる科学の間で転移が可能である。これらのリテラシーをもつことにより、学問領域内容に関わる説明文や専門書を読み、書くことができる。

8. まとめ：読書科学への示唆

本論では、読書科学の研究領域を読書からリテラシーに拡大する際に、狭い意味のリテラシー (書かれたテキストの読み書き、識字) や機能的リテラシーだけでなく、批判的思考に支えられた高次リテラシーや市民リテラシーが重要であることを述べた。そして、高次のリテラシーは、21世紀型スキルのような汎用的な認知スキルとして位置づけられ、グローバルなコンピテンスが重視さ

れるようになってきていることを述べた。

こうしたリテラシー概念の展開とそれを支える批判的思考を重視した研究から、読書科学研究や国語・読書教育実践への示唆は以下の3点である。

第1は、読書科学研究や国語・読書教育で取り上げるテキストの幅を一層広げることである。PISAなどのテストでは、物語や評論文よりも、事実やデータに基づく説明文や、仕事や生活に関わる文書が取り上げられている。さらに、連続型テキストだけでなく、図・グラフ・表などの非連続型テキストの読み取りやICT機器を通したデジタルテキストの読解も取り上げられるようになってきている。ここでは、こうした文書の理解に、3で述べた批判的思考力や5で述べた統計リテラシー、情報リテラシーなどがどのように関わるのか、これらの能力をいかに育成するのかが重要な課題となる。

第2は、テキストの批判的読解の研究や教育を拡大することである。これまでは、著者の書いたテキストを絶対的で、正しいものとして捉えて、著者の主張を1つの答えとして正確に理解することが重視されてきた。しかし、近年では、著者の主張の論理を分析した上で、著者の主張の根拠を吟味したり、反論したり、別の結論の可能性を検討するような批判的な読みを通して、批判的な思考力の育成が重視されるようになってきた。また、答えが一つでない論争的なテーマが取り上げられることもある。

さらに、批判的読解に加えて、学習者同士の討論を取り入れることによって、自他の考えを比較して、多面的に考え、メタ認知によって自分の考えを省察することを促進することができる。これは、協同的な場面での批判的思考のスキル、能動的傾聴スキルを含むコミュニケーション能力を育成することになる（たとえば、楠見・田中・平山・富江、2012）。

第3に、物語や評論文の読書に関わる研究や教育は、著者の主張や登場人物の心情の正確な理解に加えて、21世紀型スキルにおいて重視されている非認知能力の育成を視野に入れることである。すなわち、自分とは異なる

文化・価値観をもつ著者の主張や登場人物の理解を、他者を理解し、共感し、協調する非認知的能力の育成につながることである（たとえば、米田、2018）。読書を通して、自分とは異なる世界を知ること、人生を豊かにし、より良く生きることにつながる。このことは、読書科学研究や実践で経験的には示されてきた。今後の課題は、読書によって、自分と異なる著者の考え方や登場人物の心情を理解する経験を積むことが、感情推論の能力や共感性を高め、多様な価値観の理解につながることを研究と教育の両面で検討していくことである。

註

- 1) 国立教育政策研究所 (2016) は「読解力」と訳している。本稿では原語 reading literacy に依拠して「読解リテラシー」を用いた。

付記

本稿の一部は、楠見 (2010, 2011, 2015) に基づいて大幅に加筆したものである。本研究の一部は、JSPS科研費15H02465, 15H01976の助成による。

引用文献

- Bhola, H. S. (1995). Functional literacy, workplace literacy and technical and vocational education: Interfaces and policy perspectives, UNESCO, Paris, <http://unesdoc.unesco.org/images/0010/001018/101856e.pdf> (2018.1.28)
- Ennis, R. H. (1987). A taxonomy of critical thinking dispositions and abilities. In J. B. Baron & R. J. Sternberg (Eds.), *Teaching thinking skills: Theory and practice*. (pp.9-26). New York: W. H. Freeman and Company
- Griffin, P., McGaw, B., & Care, E. (2012). *Assessment and teaching of 21st century skills*. Dordrecht: Springer. (三宅なほみ (監訳) (2014) 『21世紀型スキル：学びと評価の新たなカタチ』 北大路書房)

- 平山るみ・楠見 孝 (2004) 「批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響：証拠評価と結論導出課題を用いての検討」, 『教育心理学研究』, 52, 186-198.
- International Reading Association (2018). Why literacy? <https://literacyworldwide.org/why-literacy> (2018.1.28)
- Kellner, D. & Share, J. (2005). Toward critical media literacy: Core concepts, debates, organizations, and policy. *Discourse: Studies in the Cultural politics of Education*, 26, 369-386.
- 国立教育政策研究所 (編) (2016) 生きるための知識と技能6 OECD生徒の学習到達度調査 (PISA) : 2015年調査国際結果報告書 明石書店
- 米田英嗣 (2018) 「国語・読書教育」, 楠見孝 (編) 『教育心理学. (教職教養講座 第8巻)』 (pp.167-181) 協同出版
- 楠見 孝 (2010) 「批判的思考と高次リテラシー」, 楠見孝 (編) 『思考と言語 現代の認知心理学 3』 (pp. 134-160) 北大路書房
- 楠見 孝 (2011) 「批判的思考とは：市民リテラシーとジェネリックスキルの獲得」 楠見 孝・子安増生・道田泰司 (編) 『批判的思考力を育む』 (pp.2-24) 有斐閣
- 楠見 孝 (2012) 「科学リテラシーとリスクリテラシー」, 『日本リスク研究学会誌』, 23(1), 29-36.
- 楠見 孝 (2013) 「心理学とサイエンスコミュニケーション」, 『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』, 2(1), 66-80.
- 楠見 孝 (2014) 「『批判的思考力』と大学教育」 『IDE現代の高等教育』 560号, 23-27.
- 楠見 孝 (2015) 「批判的思考とリテラシー」, 楠見孝・道田泰司 (編) 『ワードマップ 批判的思考：21世紀市民のためのリテラシーの基盤』 (pp.182-187) 新曜社
- 楠見 孝 (2016) 「市民のための批判的思考力と市民リテラシー」 楠見 孝・道田泰司 (編) 『批判的思考と市民リテラシー：教育、メディア、社会を変える21世紀型スキル』 (pp.2-19) 新曜社
- 楠見 孝 (2018) 「学力と汎用的能力の育成」楠見孝 (編) 『教育心理学. (教職教養講座 第8巻)』 (pp.7-24) 協同出版
- 楠見 孝 (印刷中) 「健康リテラシーとは何か：健康・医療情報を読み解く力」, 原田悦子 (編) 『よりよい医療を支える心理学』 心理学叢書, 誠信書房
- 楠見 孝・平山るみ・田中優子 (2012) 「批判的思考力を育成する大学初年次教育の実践と評価」, 『認知科学』, 19(1), 69-82
- 楠見 孝・田中優子・平山るみ・富江 宏 (2012) 「高校国語科における批判的読解指導の効果」, 『日本教育心理学会49回総会発表論文集』, 63,
- Masterman, L. (1985). *Teaching the media*. London: Comedia. (宮崎寿子 (訳) (2010) 『メディアを教えるクリティカルなアプローチへ』 世界思想社)
- Miller, J. D. (1998). The measurement of civic scientific literacy. *Public Understanding of Science*, 7, 203-223.
- 永岑光恵・楠見 孝 (2010). 脳神経科学リテラシーをどう評価するか：教育評価用の質問紙作成の試み 科学技術コミュニケーション, 7, 119-132.
- OECD (2018). The OECD PISA global competence framework. <http://www.oecd.org/pisa/Handbook-PISA-2018-Global-Competence.pdf> (2018.6.17)
- Palincsar, A. S. & Ladewski, B. (2006). Literacy and the learning sciences. In K. Sawyer (Ed.), *Handbook of the Learning Sciences*. (pp.299-317) New York: Cambridge University Press. (森 敏昭・秋田喜代美 (監訳) (2009) 『学習科学ハンドブック』 培風館)
- Paul R. & Elder L. (2001). *Critical thinking: Tools for taking charge of your learning and your life*. Upper Saddle River, NJ: Prentice Hall. (村田美子 (監訳) 巽由佳子 (訳) (2003) 『クリティカル・シンキング「思考」と「行動」を高める基礎講座』 東洋経済新報社)
- 鈴木 健・大井恭子・竹前文夫 (編) (2006) 『クリティカルシンキングと教育：日本の教育を再構築する』 世界思想社

武田明典・平山るみ・楠見 孝 (2006) 「大学初年次教育におけるグループ学習と討論：クリティカル・シンキング育成の試み」, 『筑波大学学校教育学会誌』, No.13, 1-15.

Tamblin, L. & Ward, P. (2006). The smart study guide: Psychological techniques for student success Mass., Oxford: Blackwell (植野真臣 (監訳) (2009) 『大学生のための学習マニュアル』 培風館)

受付：2018. 1 .31

受理：2018. 7 .12